

2月9日「真理はあなたがたを自由にする」Ⅱヨハネの手紙4～13、ヨハネ福音書8：21～36

「真理がわれらを自由にする」日本の国会図書館のエントランスにも掲げられている有名な聖句です。私たちは深い敬意をもってこの言葉を聴きます。ところが、聖書を読むと、当時のユダヤ人たちはこの言葉を聴いて喜ぶどころか、激しく怒り、自分たちは侮辱されたと感じたようです。理由は、ユダヤの人々は、大国からの支配に屈せず、反乱を起こしては自治を勝ち取り、大国にも隷属しないことを誇りとしていたからでした。必死に自分たちの自由を守り抜いてきた人たちにとって「真理はあなたがたを自由にする」とは喜びの福音ではなく、侮辱の言葉と受け取られたのです。

深く耳を澄ませてみましょう。私たちにとってこの言葉はどう聞こえるのでしょうか？今ここに集まっておられる人たちのなかに、奴隷だという人はいるでしょうか？もちろん、いないはずですが。当たり前だが、現代の日本で生きる私たちには憲法によって基本的人権が保障されています。皆さんが何を考え、どこへ行って、何をすることも、基本的には自由です。今、肺炎の影響で、クルーズ船から降りられない人々がいることがニュースとなっていますが、その自由が少しでも犯されようものなら大騒ぎです。

しかし、私たちは本当に自由なのでしょうか？『進撃の巨人』という漫画があります。少し前にセンセーショナルを起こし、アニメや映画にもなり、紅白歌合戦でも披露されました。テーマは自由。閉ざされた世界から脱出すること。多くの若者がこのテーマに惹きつけられ、共感したのです。昨年大ヒットした映画『天気の子』などもそうですが、最近話題の本や漫画にはどこか行き詰った閉塞感をテーマにしたものが多い気がします。交通網が整備され、インターネットが発達したおかげで、かつてないほど情報も、移動も、ありとあらゆるものが手軽で自由な時代を私たちは生きています。そのはずなのに、今の社会に不自由さや窮屈さを感じている若者がどれほど多いことか！そんな私たちにもイエスは語りかけられます、「**真理はあなたがたを自由にする！**」

イエスの言う「真理」とは何なのでしょう？今日の物語を読んでも、イエスとイエスの話を聞いていた民衆とではいつも話が食い違っていて、どこかかみ合いません。それは多くの民衆たちが自分たちが囚われて

いるものに気づいていなかったからではないかと思います。「23 節 あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる、わたしは言ったのである。」多くの人々は自分たちは神に選ばれたアブラハムの子孫であり、神からの律法を正しく守る自由な者だと考えていたのです。けれどもイエスは言われます。「34 節 はっきり言うておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である」彼らは自分たちが囚われている罪に気づいていなかったのです。この少し前には、不倫の現場を押さえられた女性が石打ちの死刑に処せられようとする現場にイエス様が出くわした物語がありました。確かにモーセの律法に従えばこの女性は、石で打たれ殺されなければなりません。石をもって詰め寄る人々にイエスは言いました。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」この言葉によって一人、また一人とその場を立ち去ったとあります。そうなんです。もし律法のみで生きるのならば、私たちはみな罪を裁かれ、生きることが出来ません。パウロも言います。「義人はいない。一人もない」だからこそ、私たちにはイエス様が必要でした。私たちを罪から贖い救ってくださる方が！イエスの言う真理とはそういうことです。イエスを真の神の子、救い主だと信じることです。イエスを信じることを通して、私たちは罪を赦され、永遠の命へと、神さまのもとへと招かれているのです！「14：6 わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」

今日の物語で、ユダヤ人たちは「自分たちはアブラハムの子孫だ！」とイエスに迫ります。自分たちは他の民族とは異なり、神によって選ばれた者だ！と。自分たちが囚われている罪になかなか気づけない人々。神の民として築いてきたプライドが本当に神に至る真理を説いたイエスから遠ざけたのです。この姿を私たちは責めたり、ばかにすることはできないと思います。私たちも同じように、自分では気づかないうちに、プライドや固定観念や、ありとあらゆるものに阻まれて、イエスに従うことが出来ない者だからです。

例えば、この中に「競争原理」から自由な人はいるだろうか？教会の集会に行って、結構嫌なことがあります。「うちは今年何人洗礼を受けました！」「～の集会に何人も集まりました！」数の競い合い、マウンツの奪い

合いをしているように思えることがある。教会だって競争原理から自由ではない。そこから派生する、優越感やプライド、劣等感・・・こういったものから自由になれる人は本当に少ないです。

けれども、本当にイエスを救い主だと信じるならこれらのことから自由になれる可能性はあると思います。今日、もう一か所読んだヨハネの手紙ではこうも言われていました。「あなたの子供たちの中に、わたしたちが御父から受けた掟どおりに、真理に歩んでいる人がいるのを知って、大変うれしく思いました。わたしが書くのは新しい掟ではなく、初めからわたしたちが持っていた掟、つまり互いに愛し合うということです。」ここから真理＝イエスの掟＝互いに愛し合うことだといえると思います。ですから真理とはイエスが最も大切な掟として教えられた「互いに愛し合いなさい」だといえるでしょう。真理＝互いに愛し合うことだというのであれば、イエスの言われた「自由」が何なのかだんだんわかるようになってきます。イエスは、奪い合い、競い合う罪の関係から、分かち合い、受け入れあう愛の関係へと私たちを招かれます。イエスは最後はご自身の命さえ献げて、私たちに愛することを教えられました。この方こそ、神の子である、この方に従おうと決意するのなら、私たちは、現代私たちに支配する多くの事柄から自由になれるのです。

もう一つ、今日の福音書から私が考えざるを得なかったことは、明後日、私たちが迎える日についてです。今週火曜日には私たちは「建国記念の日」を迎えます。この日を、多くの教会では「信教の自由の日」と位置付けています。どうしてわざわざそんな風に言うかという、この日が建国記念の日とされる理由が、最初の天皇、神武天皇が即位した日だとされているからです（ちなみに、これは史実ではないというのが多くの歴史家の見解です）。つまり国家神道に基づく記念日なのです。この日を建国記念の日とするならば、私たちはキリスト者であり、唯一の神を信じていながら、聖書に現された神のほかの神を信じている・・・ということになりかねません。また、憲法の定める政教分離の原則にも抵触しているように思えます。さらに言うなら、戦前、戦中に教会が加担させられた国家神道による支配に与することに繋がりがねないという危惧さえもあります。

考えすぎだと思われる方もおられるかもしれません。けれども、先の大

戦のときに日本のキリスト教会の多くは政府に賛成し、戦争を押し進める協力をしました。明治の大日本国憲法では信教の自由はあくまで天皇の臣民であること（国家に従属すること）の前提の上で認められる狭い範囲での自由でしたが、天皇の臣民としてのキリスト者であることを甘んじて受け入れた結果、ほとんどのキリスト教会は戦争に反対することがなかったのです。

戦後のキリスト教会（日本基督教団を含めて）はこの時の教会の態度が間違っていたことに気づきました。教会は天皇の臣民ではなく、まずキリスト者であるべきでした。そしてキリスト者であるならば、あのような戦争には反対すべきだったのです。戦争は最も愛から遠い行いだからです。この世の過ち、罪、その最たるものが戦争です。キリスト者であるならば戦争に賛成すべきでなかったのです。キリスト者が自由であるとはそういうことです。私たちが真理を貫きとおすとき、初めて罪に陥ることなく自由でいられるのです。

つまりこれは最も深いアイデンティティの問題なのです。私とは一体何者なのか？何に従って生きるのか？という問いなのです。この世のことに従って生きるなら、資本主義、共産主義などの各種イデオロギーであれ、国家や家族などの共同体であれ、競争原理であれ、それはなにがしかの罪の奴隷であるということです。それらはすべて人間の生み出した価値観、思想に過ぎないからです。そうではなく、キリスト者として本当に自由であるということは、そのアイデンティティの最も深いところにキリストがおられるということなのです！あなたは何者ですか？と問われたときに真っ先に「キリスト者である」と答えられることです。それが真理に属しているということなのです。その時、私たちは初めてこの世のあらゆることから自由でいられるでしょう！真理（愛）は間違いなく私たちを罪から、この世のあらゆる束縛から本当に自由にしてくれるでしょう！それは決して楽な道ではありません。戦前、戦中の教会がそうであったように、これからも問われ続けることです。そうなんです、私たちにとって本当に辛いことは罪の道を歩く方がはるかに楽だということです！けれども、私たちはこの狭くて通りづらい道こそ、永遠の命に至る道であるということも分かっています。「私は道であり、真理であり、命である」イエスが示された真理の道を一緒に歩みとおしたいと願います。